

Web教材を利用した大学英語の導入教育

松 浦 千佳子
情報メディア教育センター
(2003年9月5日受理)

Induction into Practical Englishes with Computers

Chikako MATSUURA
Center for Information and Media Studies
(Received September 5, 2003)

This paper clarifies the features of Japanese students in English classrooms, who are not accustomed to the practical use of English with a good knowledge of its grammar.

In order to induce these students into practical English, it is desirable to make them aware the real world of "englishes". For this purpose, a computer aided class room is ideal, as students can carry on their study at their own pace. The appropriate teaching material for Japanese students learning English in Japan at the moment may be something for TOEIC (Test of English for International Communication), as their efforts will surely pay off as a token for their success.

Thus, the author is now experimenting the computer aided English teaching with 269 first and second year students at Nagoya Institute of Technology. With this programme, the students are able to pay their attention to the practical use of English in the real world, while reviewing the already learnt matters, or learning new words and usages on their own pace. So far the teaching is getting along well, and the students are certainly improving their skills.

1. はじめに

現在の高校までの英語教育は、文法事項はともかくとして、内容的にも言語的にも多様な英語に対応するには十分とはいえない。こうした教育を経てすぐの学生にどのように実践的な英語運用力を身につけさせるか、つまり、学科目としての英語から道具としての英語に切り替えるにはどうしたらよいのか、筆者が現在実践している方法（Web教材を用いた教授法）を紹介することによって検討する。

こうすることにより、コンピュータを用いた英語教育にも提言を与えることができるのではないかと考える。

2. 日本語的英語から英語的英語へ

筆者は英語教育に携わって13年、名古屋工業大学では非常勤講師を含めて5年間英語を教えているが、その間学生の学習行動を観察して、彼らが会話はもちろん、読解でも生の英語に接する機会が絶対量として少ないとい

うことを痛感した。

生の英語に接することが少ないということは、本学の学生の英語力が低いというわけではない。学科目として、つまり知識として英語は知っているが、道具として英語を使う感覚がないということである。

ところが、工学部学生である彼らには、将来、おそらく文科系の学生よりも研究や企業の中での仕事において、生の英語に触れなければならないというニーズがある。実際、工学部生に限らず、道具として英語が使えれば仕事上の選択肢は飛躍的に増える。

そこで、高校までの一般的な英語教育を受けた後、工学者として必要な実践的英語運用能力を養成するためには、受験対策のために培った知識としての英語（日本語的英語）をうまく使いながら現実の英語（英語的英語）に触れさせ、英語圏の文化における実際の英語の用法に目を向けさせる導入教育が必要であると考えた。

こうした導入教育を経ることで、英語が道具として使われている場面に学習者の視点を移行させ、どのような用法が可能となるかという認識を持たせることができ、

日本語的英語から英語的英語への脱却が可能となる。

読解を例にとって見ると、英語を学科目とする場面なら、単語一つ一つの意味を検討して文構造を理解していくことが必要とされる。一方で、英語を道具とする場面では、まず大意をつかみ情報を得たい箇所を特定し、その箇所をきちんと理解していくという作業が必要となる。

筆者の13年間の経験によれば、日本人学習者(特に英語を主専攻としないもの)は、学科目としての英語学習の習慣が根強いのか、日本語に頼って理解をしたいという傾向があり、大意をつかむというよりも単語の逐語訳に終始することが多い。その結果として、不自然な日本語のまま英語を理解することとなり、生まれた和訳は言語的に日常レベルとはかけ離れたものになってしまう。そして、実際に運用するということとはつながらないようである。これは、構造を理解することに終始し、それに対応する自然な場面が連想されにくいからである。

たとえば、I am very happy to meet you. という文を日本人の大学1年生がどう訳すか考えていただきたい。

学科目としての英語的発想なら「あなたにお会いできて(私は)光栄です(①)。」となるであろう。つまり、英語構造の理解は示しているが、人工的な日本語文であり、日常の日本の生活でこうした表現を目にする、あるいは耳にすることはめったにない。

筆者が考える、より自然な訳は「よろしく(お願いします)(②)。」である。しかし、日本の日常生活でもっともよく観察される現象を考えると、「(笑顔を伴った)無言(③)」というのも適切な訳(?)と考えられる。これら2つ(②と③)は文化的要素が絡んだもので、自然な翻訳ではあるが、英語の統語構造を身につけさせるという観点に立てば適切な訳とはいえない。つまり、①の訳であれば、日本語から英語への置き換えは体系的に処理できるが、②と③では体系的な処理ができない。

体系的処理のほうが時間的効率がよい。日本の高校までの英語教育は人数的制約と時間的制約から体系的教育を取らざるを得ない。それを反映してか、前述①の和訳は日本人の大学新生によく見られる。

中学・高校の計6年とは言っても週4時間程度¹⁾の短い時間に英語の文法事項ほとんどすべてを日本人の大人数クラス(12人以上)で教えるためには、英語の統語構造を明確にした日本語に置き換えることが最も効率がよい。その意味では高校までの英語教育は完成されたものであり、評価されるべきものである²⁾。

こうした中等教育の長所を十分評価した上で、大学

1. 私立校なら週5時間。とは言っても、通常、生徒は授業時間以外に英語を使う環境にはいない。外国語学習のための環境については¹⁾松浦(2003)を参照のこと。

ではより自然な英語(生で多様な英語)の運用能力と対処能力を育成するように仕向けていくべきであろう。

まず、「英語の発想法が日本語の発想法と違う」という事実を目を向けさせることが重要となってくる。運用力が伴わない状態で高度な文法³⁾や語彙の知識のみがあると、出来上がった英語は統語構造が完全でも文化的に意味を成さないという現象が生じ、英語が通じないという思い込みを助長することになるからである。

日本語的英語の典型的な例を紹介しよう。

④ I like baseball because I belonged to a baseball club.

この英文の深層構造にある日本語は「野球部だったので、野球が好きです(⑤)。」である。論理的に考えると日本語でもおかしい文だが、日本語の運用としては許容範囲であり、実際、大学生レベルでもよく見られる文である。しかし、英語の場合(あるいは英語を話す文化では)、becauseは論理的な理由をあらわすものという観念が日本語よりはっきりしているから④の英文は意味不明なもの判断されることが多い。

日本ではbecauseは中学(入門レベル)で学ぶ文法項目であるが、④のような文化的誤用は詳しく説明されることがないようで、日本人の場合、英語を専攻とする大学生でもこうした誤用が日常茶飯事である。

“because”=「から/ので」と覚えているために発生する問題である。こうした文化的誤用を防ぐためにも実際に文法知識を与える前に英語に触れさせる教育法は屈辱にかなっているのだが、日本の中等教育のシステムを考慮すると現実的ではない。

日本語的英語には、もうひとつ落とし穴がある。日本語的英語を支えるものは単語の記憶であるので、単純記憶の得意な学生なら上述の日本語的英語の段階から発想法の転換という段階を経るだけで⁴⁾英語的英語の段階へ

2. 実際、筆者が始めて英国の語学学校を体験した1980年ごろにはレベル分けに文法力を測るテストが用いられており、日本人は概ね中級、あるいは上級のクラスに入れられていた。もっとも、その後しばらくしてからリスニングと会話の能力が欠如していることが問題になるケースが多く見られたようで、1980年代後半に英国を訪れた際には、既に大抵の語学学校で文法のテストとともに必ず面談が行われていた。

また、次のエピソードは筆者が英国のニューカッスル大学スピーチ学部在籍した折、ネイティブスピーカーの英語力の不確かさを笑う話としてよく話題に上ったのだが、英国の大学の統語論のテスト(言語学専攻学生対象のもの)では、今も昔も日本人が成績上位にランクインされる。当人の運用能力がネイティブ並みではないのにもかかわらずである。

3. 例えば、英国では仮定法は上級レベルで扱われる文法項目である。学習者はそこまでの段階で、すでに仮定法の用例に触れており、それをまとめる形で文法説明がなされ、文法演習が行われる。日本の学習法とは異なった導入法である。

4. もちろんこれには若干の期間を要する。筆者の観察では、通常の大学の講義形態(週2コマ程度)なら短くても1年程度は必要である。

移行できるが、記憶の苦手な学生の場合、発想法転換の段階に移る前に英語嫌いになってしまうという不幸な結果になる⁵⁾。このような理由で、学習者が自らを英語学習には向かないと思込んでしまうとしたらどうだろうか？現在のように英語の資格試験が声高に叫ばれている状況では、さぞかし過剰な強迫観念を感じることであろう。

最近では自動翻訳のシステムがかなり改善され、作文の課題に翻訳システムを利用する学生が増えている。それでも一般学生が入手しているものはせいぜい句のレベル止まりのものでしかない。英語を文章全体からチェックできるだけの文法能力がない場合、日本語からの干渉(直訳)も加わって、珍妙奇天烈な英語を作り出すだけの結果となる。英語に自信がない故翻訳システムを利用する学生が多いだけに、その結果は悲惨である。

以下がその例である。

⑥高校時代は野球部にいた。

⑦ It belonged to a baseball club in high school days.

⑥の英訳が⑦である。教師が問題点を推定し指摘すれば(この場合、まずは主語・動作主を明示すること)、かなりの改善が見られるが、そうするにしても教師が添削にかかる時間は相当なものとなる。しかも、添削しているのが翻訳システムの結果であるだけに全く報われない。これに加えて、教師が授業で使う教材を自分で作成すると、1コマあたりの負担は相当なものである。⁶⁾

3. 日本語的英語からの脱却—大学英語の導入教育

2. に述べた事情を考慮すると、大学英語の導入教育として以下の2点が必要であると考えられる。

- ①英語話者が用いる実際的な英語の使い方に目を向けさせること。
- ②各学習者の適性に合わせて、効果的な学習法を教師が提示すること。

では、具体的にどうすればよいのだろうか。高校までの英語で大きな挫折を経験していない学生のみを対象とするのであれば⁷⁾、大人数で同一の教材を用いてもよいだろう。ところが、クラスの構成員が均質でないとする、

5. 英国でここ10年程話題となっている読解困難症候群(Dyslexia)が英語の言語的特性によるものであるという仮説に従えば、英語が読めない・覚えられない学習者が当然10パーセント程度の割合で出てくることが予測される。なお、読解困難症候群を示すものは、遺伝的特性によるもので男子に多く、理工系の才能(空間操作)に恵まれているものが多いという報告がある。これは筆者の推測ではあるが、日本で英語の苦手な学生に理工系の男子学生が多いというのは、日本語には言語的理由で顕在しないとされているDyslexiaが英語を学習することで顕在化されるのであると言えるかもしれない。

上述①の事情を特に考慮することが必要となる。つまり、学科目としての英語に苦手意識を持っていた学生の英語に対する偏見をなくし、英語を道具として素直に使えるよう、教材の内容、あるいは教材の扱い方に工夫することが必要となる。

理想的には個別指導を行うことであるが、語学学校のように高額な授業料を徴収することが可能でもない限り、これは現実的ではない。

そこで、コンピュータのWeb教材を用いた授業の有用性が考えられる。教師が自前のWeb教材を作ることも可能だが、教材作成に費やす手間隙を考えれば、市販のもので適当なものがあれば十分であろう。教師がWeb教材作成に費やす時間のおよび経済的コストと、市販教材のコストを比較検討したうえで、自前の教材がどれだけ市販教材によってもたらされる教育上の不利益を補えるかを熟慮して自前か市販か決めればよく、自前にこだわる必要はないと考える。

市販の教材は安いものではないが、その分学習する面白さ、Web教材の使いやすさ(操作性)に配慮したものがあ、完璧とはいえないかもしれないが授業を円滑に進める道具として使う分には十分である。

では、Web教材の内容はどんなものがよいかということを考えなければならないが、英語を主専攻としない学生の場合、導入教育としてはTOEIC(Test of English for International Communication)対策のWeb教材を用いることが効果的であると考えられる。以下にその根拠を述べる。

4. なぜTOEICか？

昨今の社会情勢を考慮すると、TOEICが学生にとって大変学習意欲をそそるテストであるということは事実である。

TOEICは日本企業からの要請に応え、アメリカで作成

6. ちなみに筆者の場合、学生一人当たりの作文の量がワード原稿A4(標準フォーマット)半分ぐらいだとして、20人クラスなら添削に最低でも1時間。与えたテーマが自由で、学生が自由に書いてくるようなものと添削に3時間はかかった。

添削原稿を清書させても当然不完全な部分が見られるため、「作文→清書→さらに清書」というパターンをとった。これを2週おきのペースで1年続けると、効果が歴然とし運用能力も定着してくる。

この作業に授業時に扱う教材作りを加えて1コマあたり毎回5～6時間の準備をしていたのではないだろうか。

筆者がこれを行えたのは、当時非常勤講師として複数の大学で教えたため同じ教材を使用していても支障がなく、誤りの予測ができたからである。

3年前に名古屋工業大学の専任講師となり担当コマ数がかなり少なくなったといってもあまり現実的な取り組み方ではなかった。

7. おそらく英文学・英語学専攻の学生の場合。

されたテストである。こうした背景と宣伝効果もあり、現在トヨタをはじめとする大手企業では入社試験の脚きりや昇任試験の目安としてTOEICを採用しているところが多い。

TOEICは自然な英語(英語的英語)で質問の説明を聞き(あるいは読み)、問題を聞き(あるいは読み)、解答するという形式のテストである。解答は記述式でなく選択式(選択肢は4つ)なので、結果的に英語の知識を試すタイプの設問が多くなっている。つまり、英語の知識があれば運用能力がそれほど高くなくても解答しやすいし、その知識の多くは英語的英語の運用のために必要なものであるということが明確になっている。

対策本や攻略本が数多く出版されていることからわかるが、受験対策のできるテストなので、日本人の従来の英語学習のスタイル(学科目としての英語学習法)に無理なくなじむものである⁽⁸⁾。設問も英語のビジネス環境を設定してあるので、ごく自然な英語(英語的英語)が使われており、受験対策をすることでより自然な英語に触れることができる。

しかし、現実に英語を専攻としない工学部の学生と接すると、TOEIC受験を現実的に考えるのは3,4年次あるいは大学院博士課程前期になってからである。専門科目の負担が増え、さらに大学受験で覚えた試験を受けるときの要領もすっかり忘れたところである⁽⁹⁾。英語の授業開講数も少なくなっている⁽¹⁰⁾。TOEICの点数が低くなるのは当然のことである。

前にも述べたが、TOEICは「受験テクニックを要する

8. ちなみに米国のTOEFL(Test of English as a Foreign Language)は同形式の選択式の試験であるが、米国の大学進学を考えていない学生には内容的になじまない。日本人のTOEFL平均点が低いのは、ただこれだけの理由ではないかと考えられるふしがある。

一方で英国のIELTS(International English Language Testing System)、ケンブリッジの各種試験は「読む・聞く・書く・話す」の4技能をすべて個別にテストするものである。

IELTSは、TOEICやTOEFLに比べると受験対策が一筋縄ではいかないのに、テストとしては理想的であるが、英語の運用経験に乏しい日本人学生には難しすぎる。ちなみにIELTSのポイント6.5は、英国留学のボーダーラインであるが、英検1級より上のレベルといわれている。

なお、TOEICを受験する目的は、あくまでも英語でコミュニケーションを行う最低限の必要事項を知っているかどうかなので、満点や高得点が取れたからといって、英語が使えるということにはならない。

²⁾ 鳥飼玖美子氏(2002)によるとTOEICの得点が730点以上でやっと会話のテストが別途受けられ、それまでは会話能力を測定しても意味がないというのがTOEICの基本的趣旨とのことである。

たとえば、工学系の学生の場合、最低ラインを450点(トヨタのボーダーライン)程度とし、これがクリアできれば生の英語の素材(英文サイトや、英文雑誌、書物、映画、TV)に目を向けさせるべきであろう。

英語テスト」である⁽¹¹⁾。実際に英語の運用能力がなくともある程度のところまで得点が取れるものである。ということは、国際レベルの英語力判定試験の中では唯一、日本の英語学習パターンを経てきた受験者でも得点の取れる見込みのある、つまり、英語を学ぶ意欲を喪失させないテストなのである。

幸か不幸か受験テクニックに慣れている大学1年生にTOEIC対策をさせて、より自然な生の英語に触れさせると同時に、おそらくピークに達している受験テクニックをうまく活用させて就職に結びつくような得点をとらせるということは大変魅力的な動機付けとなる。

さらに、大学1年生に限ったことではないが、自分の英語力が点数で出てくるというのは極めてわかりやすい。ゲームに慣れている学生であれば、なおさら、次はもっとがんばろうという気持ちになる。

以上の理由から、筆者は平成15年4月より本学1・2年次を対象にTOEICのWeb教材を用いた導入教育を行っている。以下でその概要を報告する。

5. 事例報告

筆者は平成15年度4月より本学1・2年次各2クラス、2部2年次2クラス(いずれも選択科目)において、Web教材アルクネットアカデミーのTOEIC対応のコースを採用することにした。

5-1. 対象者

学生数は、前述の6クラスの計269名である。うち1年次の2クラスの学生(63)名は入学式直後に全員TOEICを受験している。2年次の学生はTOEICを受験していないが、1部・2部ともに約半数が1年次にアルクネットアカデミーの「初級・中級コース(600点対応)」を用いたクラスを受講しており、受講者全員がTOEICについて何らかの予備知識を持っていた。

本学の1・2年次対象の英語のクラスは必修・選択科目ともにレベル分けのクラス編成を行っているが、筆者が担当したTOEICクラスは基礎から上級までの学生が受講している。

5-2. 使用教材

本学メディア教育センターは、Web教材アルクネット

⁹⁾ 受験テクニックについては2年次でも怪しいところがある。

¹⁰⁾ 本学では、平成15年度現在、3・4年次対象の英語の授業は選択科目がそれぞれ週1コマ開講されているのみである。

¹¹⁾ 受験テクニックを要しない英語のテストは、現在のところ、英国のIELTSぐらいであろう。それでも、英国大学での外国人受け入れ増加に伴い、ここ4,5年でIELTSの受験対策をうたう語学学校が増えてきている。

アカデミーの「初級・中級コース (TOEIC600 点対応)」, 「技術英語」の学内全員向けのライセンスを購入している。平成 14 年度までは, この「初級・中級コース」を用いて, 1 年生 (1・2 部とも) 対象の講義 (選択科目) を開講していたが, コンピュータが使える更にヘッドフォンで良質音が聞こえる教室 (CALL 教室) の収容人数の問題から, 定員が 50 名程度となってしまい, 希望者が多数いるにも拘らずそれに応じることができないでいた。

その後, 平成 14 年度後半より, アルクネットアカデミーの「スタンダードコース (TOEIC800 点対応)」, さらに Web 教材作成ソフトの Web Class が導入された。また CALL 教室以外のコンピュータ設置教室 (各サテライト教室) の音声システムも改善される運びとなった。

これにより, 2 年生対象のコースを開講しても支障ないと判断された。

上述「初級・中級コース」, 「スタンダードコース」とも, 基本的には, リスニング演習・リーディング演習・テスト演習の 3 つの演習からなっている。

リスニング演習は, 会話のやり取り, または説明文を聴いた (ステップ 1) 後, 質問に答え解答を確認し (ステップ 2), 和訳および注釈を参照しながらもう一度聴きなおした (ステップ 3) 後, 発話スピードを速めたり遅くしたりするなどして繰り返し聴きなおし (ステップ 4), 最後にもう一度スクリプトと和訳を確認しながら聴いて (ステップ 5) 終了するという構成である。

リーディング演習も同じく 5 つのステップからなる。ある程度まとまりのある長文を読んだ (ステップ 1) 後, 質問に答え解答を確認し (ステップ 2), 日本語訳および注釈を参照した (ステップ 3) 後, 意味のまとまりのある文節やキーワードに着目しながらスピードリーディングを行い (ステップ 4), 最後にもう一度和訳と共に英文を確認して終了する (ステップ 5)。

リスニング演習・リーディング演習ともにステップ 1 から 5 までで 1 ユニットとなる。題材は TOEIC 対応の自然な英語を用いたもので, 内容は仕事のやり取りから文化的なものまで多岐にわたっている。

テスト演習は 1 ユニットがリーディングセクションとリスニングセクションからなり, それぞれ制限時間が設けられているが, 時間をオーバーしても, もう一度やり直して学習できるようになっており, スピードを上げる前の段階で内容を確実におさえない学生にも適している。

「初級・中級コース」はリスニング演習・リーディング演習・テスト演習それぞれ 20 ユニット・20 ユニット・10 ユニットからなり, そのほかにテスト問題のパート別演習 (TOEIC のテストパターン対策) 5 ユニットがある。リスニング演習・リーディング演習・テスト演習をはじ

めから順番に半分終了すると, 中間テストがあり, すべて終了すると修了テストがある。中間テストと修了テストは制限時間があるという点でテスト演習と似ているが, やり直しがきかないという点で異なる。

「スタンダードコース」では, はじめにレベル診断テストを受けると, 学習者のレベルが提示される⁽¹²⁾。同時にレベル診断から適当と判断されるリスニング演習・リーディング演習が星の数 (1 つから 5 つまで) で選択できるようになっている。リスニング演習・リーディング演習はそれぞれ 50 ユニットあり, 各ユニットに星が 1 つから 5 つついており, 学習者は題材と星の数を参照して, 好きなユニットから始めることができる。テスト演習は 10 ユニットあり, これには星はついていない。中間テスト・修了テストはない。

「スタンダードコース」と「初級・中級コース」の違いは, ①レベルの高いものが含まれるか否か, ②レベル診断の有無, ③中間テスト・修了テストの有無であるが, リスニング演習・リーディング演習のステップとテスト演習の構成は同じパターンである。

本学のアルクネットアカデミーは学内利用のみのライセンス契約で自宅での接続を前提としていないため, 学生が有効に時間を使えるよう, 自宅用教材として³⁾尾山大氏 (1997) の『TOEIC 超スピード攻略』シリーズの中からイディオムと文法の計 2 冊を補助教材とし, 毎週の学習範囲を提示して小テストを行った。この小テストは前述の Web Class を用いて, 筆者が作成した。小テストの形式は TOEIC と同じ選択方式である。

5-3. 進め方

第 1 週に TOEIC の簡単な説明を行い, 現在の日本企業で TOEIC がどれほど重要視されているかを強調し, 動機付けを行った。第 2 週目からは以下のように授業を進めた。1 年次, 2 年次とも基本的にはまったく同じ授業形式である⁽¹³⁾。

授業時間 90 分のはじめの 10 分程度 (個人差あり) を小テストとし, その後, 学生が自分で適当と判断したペースでアルクネットアカデミー各コースの演習を進めさせ

12. リスニング・リーディング別々に表示され, それぞれ入門から上級までである。表示にはそのレベルが現実の場面ではどうなるのか詳しい説明がついている。

13. 講義を開始する前の段階では, アルクの想定する対応得点を考慮し, 1 年生には「初級・中級コース」, 2 年生には「スタンダードコース」を実施する予定だった。しかし, 2 年次で「スタンダードコース」を実施してみたところ, はじめのレベル診断で入門・初級と判定された学生は「スタンダードコース」を進める上でかなりの困難がみられた。そこで, 1 年次に「初級中級コース」を受講しなかったものについては, 「スタンダードコース」を 10 パーセントほどやらせた後, 個人面接を行い, 希望者には「初級・中級コース」を選択させた。

た¹⁴⁾。

第2～3週はコンピュータの操作上の問題が予測されたこと、さらに学生の学習状況を把握する必要があったので、各コースの進め方は学生各自の判断に任せ、筆者はその様子を観察した。

第4週から個人面談の形式で学習相談を開始した。学習相談はクラスの人数により、また適宜状況に応じて呼び出しを行ったこともあり、面談の頻度に差があるが(各学生隔週から4週に1度の間隔で面談)、特に問題のない学生でも月に1度は1対1で面談できるようにした。学習相談の内容は受講票に書き込み、記録とした。面談の際、ネットアカデミーの成績管理表とWeb Classの小テストの成績管理表とを参考にはしたが、「学生個人の判断・見解」を重視した。というのは、点数として問題がなくても、本人が不安に思っているような状況が多々観察されたからである¹⁵⁾。

平成15年7月11日現在で、1部のクラスは15講義中12回が終了、2部のクラスは13回が終了している。

夏休みには課題として、TOEIC関連の参考書あるいは問題集、または何か英語の本の3種の中から1冊を探し出し読破することを課題とし、変化をつけた。

夏休み後の第14・15回講義では6クラス全体統一のテスト(TOEIC形式のマークシート解答方式のもの)を実施する予定である¹⁶⁾。

5-4. 経過報告

第1週でTOEICの説明を行い、同時にネットアカデミーの仕組みを教えたことで、学生がかなり意欲的なムードで学習に取り組むというよいスタートが切れた。特に「スタンダードコース」の場合、レベル診断テストの結果がただのレベル付けのみでなく、英語を使う具体的な場面でどのようなレベルなのか説明されているため、大変興味を持ったようだった。

コンピュータの画面を90分眺め続け、演習に取り組む集中度には個人差が認められた。そこで、単位が関わる授業内の演習であるということを繰り返し強調し、少なくとも週1日の授業時間だけは集中できるよう、居眠りしている学生などは直ちに起こして演習を続けさせると

いう姿勢を徹底した。

4) 松浦(2002)でも報告したが、講義も大体5回目ぐらいの授業になると慣れが生じてきた。特に2年次の学生の場合、小テストのみ受験してから無断で退出するものが見受けられたので、座席表を作り、出席状況は授業開始時のみでなく授業時間中を通して念入りにチェックしているという姿勢を見せた。このため、いわゆる「サボり」は減少した。

個人指導では、英語の生の題材を扱うときに気をつけておくべき3つのポイントを明示した。①全体として何が述べられているのかを理解する、②問題を解く鍵になる部分がどこにあるのか探す、③問題を解く鍵となる部分を正確に理解する。

リスニングとリーディングのスキル向上のための対策としては、リスニングの場合はディクテーションあるいはシャドーイングをさせ「理解がたとえ100%でなくても英語の音をすべて再生できるように」、リーディングも同様に「理解がたとえ100%でなくても英語をすばやく目で追えるように」することで、全体をつかむことを意識させ、和訳はできるだけ最後まで見ないようにさせた¹⁷⁾。

学生の反応を見ていると、案外こうしたやり方を知らずに、ただ単語がわからないことをプレッシャーに感じてできないと思い込んでいるようだった。また、学生の個人的見解は必ずしも成績と一致しておらず、しっかり理解したうえで次へ進むタイプと、多少わからない部分があっても次へと進めるタイプがあり、それを確認した上で対処法を提示するのは効果があったようだ。

受講時の学生のレベルは基礎から上級までと幅広かった。確かに、現在でもレベル差は感じられるが、各レベルの構成員には変動が見られるようである。特に1年次のレベル分けはTOEICを用いて行われているのだが、TOEIC得点300点までの学生(基礎クラス)は、4月からの3ヶ月で飛躍的に点数が伸びている。問題の形式を理解していなかったか、テスト時に集中できなかったかで、能力が発揮できなかったようなものが多い。

得点の高いものは、TOEIC高得点獲得にのめりこむようなところもあったので、そういう学生には工学系のWebページを紹介し、学科目としての英語の勉強としてではなく、内容を追いながら英語が読めるように仕向けた。

夏休み前の段階でテスト演習や中間テストなどの数値的結果で得点の伸びが明確に現れたので、個別面談の際もっと勉強がしたいという声が多く出た。実際に演習に慣れ意欲的になったところだったので、夏休みという中

14. 平均して、毎週2～3ユニットのペース。

15. 特にリスニングのほうに苦手だと思っていたら、アルクネットアカデミーによる評価はリーディングより高かったという見解が多かった。

16. このテストについては、夏の課題を課する前に述べたので、TOEIC関係のものを課題として提出する学生が多いのではないかと予測される。英語を道具として扱うための予備教育をしている以上、夏の間だけでも、TOEICからはなれて自分の関心に合った英語の本を1冊探して読んでもらいたいところである。

17. 案外こうした指導にびっくりする学生が多かった。すべてを100パーセント理解しようとするために、英語に触れる絶対量が減ってしまっていると推察された。

だるみを経ずに試験が受けられたら理想的だったと反省させられる¹⁸⁾。

6. 結び

以上に述べたように、本学1・2年次、2部2年次を対象に大学英語の導入教育としてTOEIC対策講座を実施している。これは以下の理由で効果があると考えられる。

- ① 受験テクニックをうまくTOEIC対策に移行できる。
- ② コンピュータによる自習形式のため、他の学習者に煩わされることなく、自分のペースで学習に集中できる。
- ③ 学習成果が点数により表示されるため、わかりやすい。
- ④ なんといってもTOEICは社会的認知度が高い。
- ⑤ TOEIC対策をすることで、日本語的英語から英語的英語への移行が図れる。

効果的な学習を促進するためには以下の点が重要である。

- ① 定期的に個人面談を行い、学生に学習の癖を認識させ、それをうまく伸ばせるように指導すること。
- ② TOEICはあくまで現状の社会的必要性から勉強しているものであることを強調し、これを最終目標とさせないこと¹⁹⁾。

大学英語をどのように捕らえるかによって、予備教育にはさまざまなアプローチが考えられるが、現状の新入生が高校までの英語で培ってきたものを無理なく生かして、まずは高校までの段階を修了できたという実感を持たせることは有意義であると考えられる。その意味でTOEICを採用することは特に英語を専攻としない学生には有益であろう。

ただ、近年、新聞等で見られるようにTOEIC高得点獲得が英語学習の最終目標になってしまうことは問題であろう。TOEICのような選択式のテストを目標にすると、実際の英語運用力の養成は見込めないからである。

その意味でも、TOEICの後、どのような演習が必要であるか、TOEIC対策の演習をするうちに提示することが必要であると考えられる。たとえば、大意把握のためのリスニング・リーディング等である。こうすることで、たまたまTOEICのような形式のテストに向かない学生にも、実用的英語力養成の手ほどきができるかと確信する。

TOEICに振り回されることなく、TOEICを利用して本来求められるもの（英語を道具として扱うこと）へと移行させる方式が大学での英語予備教育として必要なのである。

文献

- 1) 松浦千佳子 (2003), 言語習得における環境の役割, 名古屋工業大学紀要第54巻
- 2) 鳥飼玖美子 (2002), 『TOEFL・TOEICと日本人の英語力—資格主義から実力主義へ』, 講談社現代新書
- 3) 尾山大 (1997), 『TOEIC超スピード攻略英文法』, 曙出版
尾山大 (1997), 『TOEIC超スピード攻略イディオム』, 曙出版
- 4) 松浦千佳子 (2002), 非専攻生対象の英語教育—実践レポート, Litteratura23

18. 1年次は1月に2度目のTOEICを受験することが義務付けられているので、全員に夏休み前に受験させることはためらわれた。

19. TOEICの得点目標は、企業内の昇任等の目安とされる600点程度とする。学生がこのレベルに達した時点で英語の各種サイト・読み物などを扱わせ、自分で英語の文章を作るなどの演習に移行する。